

研究部通信



発行: 令和3年9月15日
文責: 廣田
第3号「目標と評価規準③」

単元の目標と評価規準のルール～保健体育科～

体育の授業の中で、「右向け、右。」という指示を出した際に、もしも全体の2割程度の児童生徒が逆方向を向いていたら、皆さんはどうしますか。

「お箸を持つ方が右向きだよ。」という説明をすれば、左利きの児童生徒を取り残すことになるかもしれません。「先生が指を指している方が右です。」と、咄嗟に身体を使って表示するならば、多くの児童生徒が右を向くかもしれません。ですが、定着は難しく、次の時間には同じやりとりが為される可能性が高いです。「正面の先生が☆のカードを持っています。あなた達から見て、右にはいつも何のカードがありますか。」と問いかけ、右に置いたカラーコーンには毎回決まったイラストのカードが置いてあるならば、そのうち定着するかもしれません。ですが、準備は大変です。

何を学ばせるか、どうやって学ばせるか、学習の量に過不足はないか、体育が苦手な子供を中心に据えられているか…体育科は繊細です。その反面、教師の在り方を考え直す上では、すべての教育活動に精通し、広がりを見せる教科の1つとも言えるように思えます。

教科	観点	知識及び技能 (知識・技能)	思考力・判断力・表現力 (思考・判断・表現)	学びに向かう力、人間性等 (主体的に学習に取り組む態度)
体育	目標	文末は「～できる」として示す。 ☆熊本県HPによる「指導案作成のポイント」では、 3観点とも文末表現は「～できるようにする」となっている。 ☆しかし、 体育のみ、主語が教師であるならば、指導案作成の上で混乱が予想されるため、この場合に限り、他の文献を参考にし、主語は子供にしてはどうか。(すなわち上段の例)		
	評価規準	文末を「～できる」「～している」とする。 (文例) ・跳び箱、鉄棒運動を楽しむための基本的な動きや各種の運動の基礎となる動きを身に付けている。 (知識に関する文例) ・球技には、集団対集団、個人対個人で攻防を展開し、勝敗を競う楽しさや喜びを味わえる特性があることについて、言ったり書き出したりしている。 (技能に関する文例) ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。		

(注※)
【小・中学部】

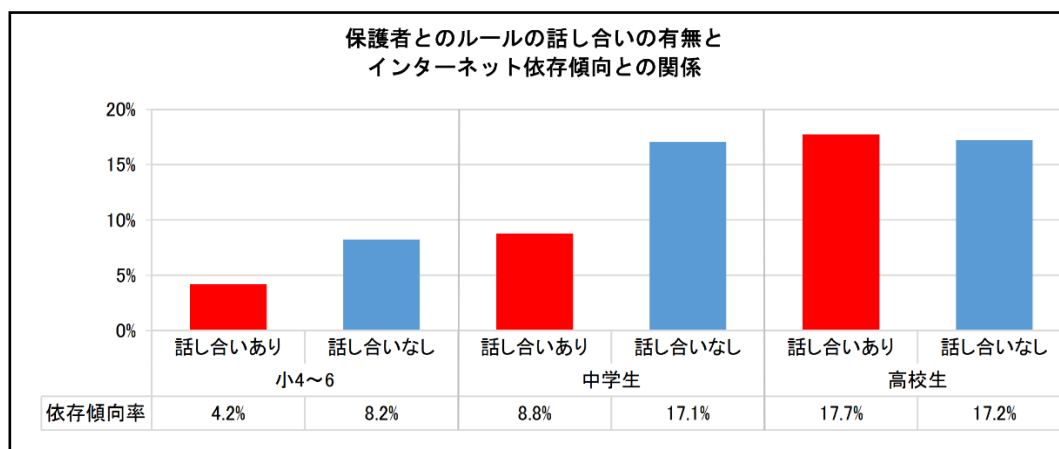
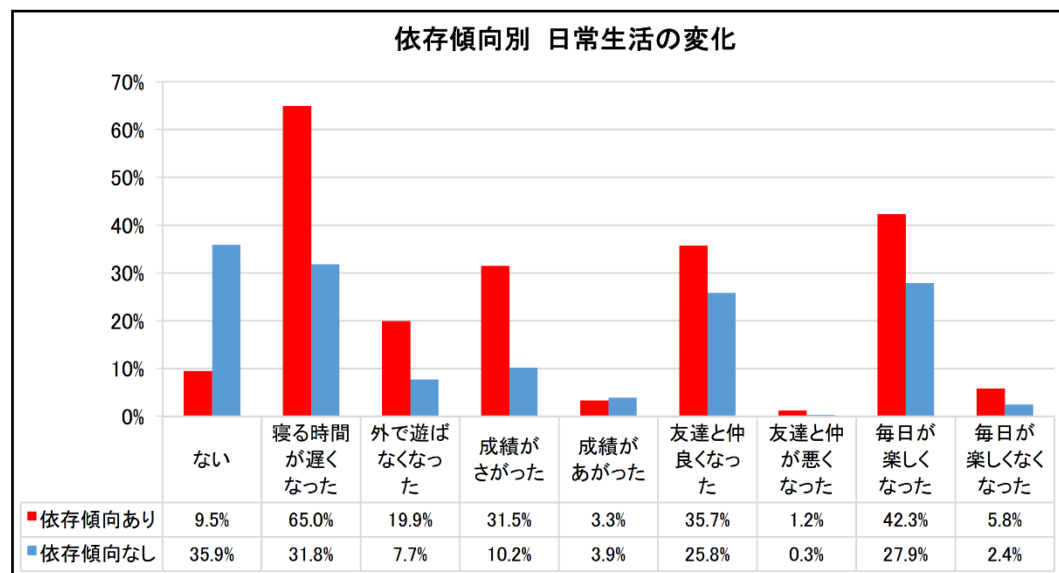
主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自分の感情や行動を統制する能力、自らの思考の過程を客観的に捉える力など、いわゆる「メタ認知」に関するもの(学びに向かう力)と、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど(人間性)から構成されている。

【高等部】

運動や健康における競争や協働の経験を通して、公正、協力、責任などの意欲を育てるとともに、健康・安全を確保し、運動に取り組む態度を養うことを目指したものである。



教育動向コーナー ～教師として知っておこう～ テーマ:「深刻化するインターネット依存」



上に、データ結果をグラフ化したものを2つ掲載しています。いずれも令和元年に兵庫県で小1～高3の児童生徒9974名及び保護者5610名を対象に実施されたアンケートの集計結果(一部)です。

インターネットの依存傾向の有無がもたらす子供たちへの影響や、保護者による働きかけが、いかに子供の成長に効果的であるかが一目瞭然です。

果たして「今担任している児童生徒はスマホを所持していないから安心」なのでしょうか。あるいは「担任する児童生徒は自宅や学園が適切に管理しているから、学校として現時点で特にすることはない。」で、良いのでしょうか。

児童生徒の自立と社会参加に導く最前線に立つ以上は、支援者がそばにいないでも自己で行動をコントロールする力を身に付けさせることが求められます。「児童生徒がいつスマホやパソコンを所持しても大丈夫!」と胸を張れるように、先手先手の指導を心掛けたいですね。

「つまみぐい」パワー



文献の一部抜粋から多くを学ぶコーナーだよ!

知恵55 授業づくりの常識を疑ってみることからはじめよう

先日、私の公開授業を子どもの席から写したビデオを見ました。自分の授業をビデオで見直すことは何度もしていますが、子ども目線で子どもの席から写したビデオははじめてでした。すると、教室の前からは子どもたちによく見えていると思っていたのに、盛り上がっている授業の様子が、前の席の子どもの頭で隠れるんです。思っていたよりも、よく見えないんだな、このあたりの席の子は前の子の頭をよけて、身を乗り出したりして見ているんだろうな、と新たな発見がありました。

子どもの目線で見たら、子どもが考えるとしたら…そんな思いでいれば自ずと授業が変わってきます。

子どもの実態はある意味そのクラスの教師の力量を写し出す鏡です。クラスに活気がなかったら、発言が少なかったら、子どものせいにする前に、担任である自分の責任かもしれない、と試してみることです。

「田中博史の楽しくて力がつく算数授業55の知恵」

(文溪堂) 一部抜粋

児童生徒の自己肯定感を高める役割にある教師ですが、私たち教師自身の自己に対する満足度が120%、というのはいかななものでしょう。「向上心を持ち続け、時には立ち止まり、欠点は改善したり、長所と思っているものが“思い込み”ではないか確かめたりしよう。」というメッセージと受け止められます。色々な様式シートはなくても、実はこの意識だけで、授業はウンと改善されるのかもしれない。

今回の記事の参考・引用文献

- ・「熊本県学習構想案作成のポイント」(熊本県教委 HP)
- ・特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)
- ・知的障害特別支援学校における「深い学び」の実現(監修:横倉久 東洋館出版社)
- ・「令和元年度ケータイ・スマホアンケート」及び「インターネット夢中度調査」結果(公益財団法人兵庫県青少年本部)
- 「田中博史の楽しくて力がつく算数授業55の知恵」(文溪堂) 一部抜粋